

1、防疫用殺虫剤のマダニ承認

2013年初めより重症熱性血小板減少症候群（SFTS）感染の事例が西日本を中心に報告されました。主な症状は、発熱と消化器症状で、重症化し死亡することもあります。

多くの場合、ウイルスを保有するマダニ類に咬まれることにより感染します。

このマダニ類は、食品等に発生するコナダニや衣類や寝具に発生するヒョウヒダニなど、家庭内に生息するダニとは種類が異なります。このマダニ類は、固い外皮に覆われた比較的大型のダニ（種類にもよりますが、成ダニで吸血前3～8mm、吸血後10～20mm）で、主にシカ、イノシシ、野ウサギなどの野生動物が出没する民家の裏山、裏庭や森林・河川・公園等の草むら等の屋外に生息しており、市街地でも見られ日本全国に分布しています。

2013年当初マダニ類は、医薬品及び防除用医薬部外品の衛生害虫としての対象に入っておりませんでした。同年6月に厚生労働省より「イエダニ」または「ゴキブリ」を対象に承認を受けている薬剤に限り一部変更承認による迅速審査が実施されることが通知され、同年11月末と12月末に表1に示す防疫用殺虫剤が承認を受けましたのでご報告いたします。

用法用量は、「イエダニ」または「ゴキブリ」と同じですが、詳細は各メーカーにご確認ください。

尚、今後も野外試験を国立感染症研究所や（一財）日本環境衛生センターのご指導で実施しデータを蓄積していく予定です。

2、マダニに対する効果確認について

今回の迅速審査申請には、メーカー責任でマダニに対する効果確認を2機関で実施しておくことが必要で、日本防疫殺虫剤協会の会員会社の多くは、自社試験と（一財）日本環境衛生センターの委託試験で確認しております。

今回は、（一財）日本環境衛生センターに依頼した準実地試験の結果をご紹介します。試験方法及び結果は、以下の通りです。

1. 試験方法

(ア) 試験場所

- ① 山梨県韮崎市の山中

(イ) 散布及び調査方法

- ① 試験区 : 5m×5m 地表面が雑草か落ち葉で覆われている場所
- ② 供試虫 : フタトゲチマダニ若虫を10匹ずつ入れた腰高シャーレ（写真3）を図1のように5ヶ所に設置し、薬剤を均一に散布。
- ③ 処理薬量 : ゴキブリ・イエダニに対する処理量及びその半量

- ④ 散布方法 : 乳剤及びフロアブルは自動噴霧機、粉剤は篩で散布。
- ⑤ 効果判定 : 設置した若虫のノックダウンおよび致死状況で判断。
- ⑥ 植物への影響 : 鉢植えの植物を試験区に1カ所設置し状況を観察。
- ⑦ 魚への影響 : 金魚を入れた水槽を3カ所設置し状況を観察。

2. 試験結果

(ア) マダニに対する効果

試験を実施した薬剤は、全てマダニに対する効果を確認することができました。

(イ) 植物に対する影響

花や葉に褐色化がみられた薬剤もありましたが、回復しました。

(ウ) 魚に対する影響

一部の薬剤に影響が見られました。水系に流入しないよう注意が必要です。

現場で薬剤を使用する際の参考にしていただければ幸いです。

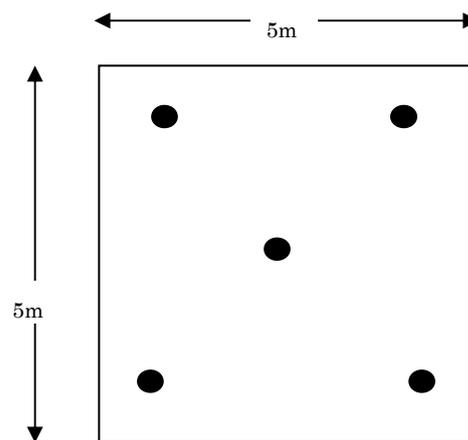


図1 ●供試虫の配置場所



写真1 散布風景



写真2 マダニ、植栽、魚設置



写真3 供試マダニ



写真4 供試魚